君も君もマスクのままに待ちており春の山菜てんぷらそばを　藤島秀憲

今月号にはマスクの歌が多い。ついでに言えば「朝日歌壇」「東京新聞歌壇」への投稿葉書にも多かった。どこに行ってもマスクの人だらけである。そんな社会の空気、そんな東京の現実をそのまま一首にしたのがこの歌。作歌する側にとって、「そのまま」が案外むずかしいのだが、蕎麦屋という卓抜な場面設定が勝負だった。

過去となり新聞結束されてあり束芋（たばいも）の描ける挿絵覗かせ　奥山かほる

束芋が出てくる意外性だけではなく、新しいものはたちまち古くなるという寓意を読ませて卓抜である。束芋は四十代の現代女性美術家。先端的であるとだれもが思っている束芋の絵が、過去として結束されているという。痛烈である。

二度と会ふことなき人の庭の隅てまり連ねてらふ梅の咲く　太田冨美恵

上句は通りがかりに見た他人の家の庭の意味だろう。しかし、こう表現されると、単なる通りがかりの家の庭という意味だけではなく、一期一会というか、繰り返すことのできぬ人生の一場面だという第二の意味が浮かび上がる。

シロップの瓶並びいるカウンター　時に車のライト射し込む　屋良健一郎

バーのカウンターだろう。バーの小さな窓から、通過する車のライトが射し込むのだ。カクテルを作るためのシロップ。酒類とも水ともちがう、糖分独特の濃度をもつシロップは、他の瓶とはちがう反射の仕方をする。その場の空気の外側にいる作者の視線が浮かび上がる。

安宿に寝入っておればしゃばしゃばと生きる人みな水の音する　帖佐光浩

寝ていたんだけれど目が覚めた、の意味だろう。壁が薄いので隣室で水を使う音が聞こえるのだ。ポイントは下句。死者ではない生きる人は例外なく皆、水の音がするのだという発見。もちろん自分だって例外ではない。壁が薄くて寝づらいけれど、まあ仕方がないか、そんな気分か。

列中の位置がたまたまストーブの正面になる朝の幸福　十亀弘史

「冷たい」とか「寒い」という表現はないが、猛烈に寒く、ひどく冷たいらしい、ということが分かる。歌の表現は、直接に言わなくても読者に的確に伝えることができる好例。「朝の幸福」の冗談めかした言い方に注目。

美しい人として見る場所入りのピンクの着物の遠藤関を　安東礼子

冒頭の「美しい人として見る」が独特。ふつう、相撲取りは相撲取りと見るわけだからである。人や物を新鮮に見るとは、レッテルにとらわれないことだと思わせる。作者は大ファンなのだろう。

いつもより大きくふてぶてしく見えて寝そべるような冬の三日月　宮崎江美

近年は遅くまで市街地が明るくなったせいで、日常的

短歌の現在

No.469　今月の15首を読む

佐佐木幸綱